



職人書海本

建保十二年  
同具本  
十二書神立別  
止

五

特別  
8053  
3





職人歌合畫本

建保 十二番  
日異本  
十二番 神主判

五







建保三年職人執合

建保第三の秋のころ、東山院の念佛、九名の  
 人、男女多きも、殊にきも、こぞと仰し、  
 みらくの者ども、人なしくよ、あつて、馳す  
 侍を、時、九月十三日の月、くまを、うら  
 ぶ、心、ほろ、く、分、を、ま、連、歩、な、ご、う、て、心、を  
 ち、ま、つ、つ、あ、ま、び、く、を、ま、あ、う、や、あ、ま、  
 いた、ま、た、く、の、者、ども、心、を、ま、あ、う、て、あ、ま、び  
 け、ま、よ、月、や、り、く、山、の、く、小、入、ん、と、う、る、を、り  
 け、お、の、く、今、宵、は、名、教、を、ま、あ、う、て、あ、ま、び  
 が、あ、く、侍、れ、う、て、八、名、の、僧、主、と、な、れ、た、侍、あ、

昭和三年は月日寄  
 和日不作良贈



題 月 意  
作者 左  
醫師 佛師 鍛冶 刀磨 巫女 深草

右  
張陽師 徑師 番匠 鑄物師 育目 壁塗

何よりと云へば、いふやうせし、ふもくもんの  
あそびやうし、あそびのながれ、そのうら  
まをいふ、あそびをいふ、あそび



紳 搔  
塗 師  
博 步  
針 磨  
桂 女  
高 人

造 打  
檜 師  
舟 人  
穀 隆 引  
大 原 人  
海 人



一番  
左

材を以て辨る月のちやちやふんちやふんちやの  
なりくちやちや  
君あふんちやちやちやちや  
あつちやちやちやちやちや

再拜<sup>大</sup>やちやちやちや  
ちやちやちやちや  
ちやちやちやちや  
ちやちやちやちや  
ちやちやちやちや



ねんちあま  
君は鬼氣の  
あつちやちや  
ちやちやちやちや  
御神楽ちやちや



月の  
たのち鬼氣ちやちやちやちやちやちやちや  
ちやちやちやちやちやちやちやちやちやちや  
ちやちやちやちやちやちやちやちやちやちや  
ちやちやちやちやちやちやちやちやちやちや  
ちやちやちやちやちやちやちやちやちやちや









色  
 左にうつれとすふ  
 皆え付判者の  
 及所と何うか  
 何を猪とす  
 定こす

二番

左

和云訓字  
 判詞ニ録  
 トテ刻  
 案トテ入  
 シ直ニ置  
 ノ書執ナ  
 ルニキ  
 ミヨクト  
 ムレ  
 訓直みとまあらそふ月すあ  
 ひんぞくひくんらそすれ  
 あつひうゆまなる君  
 佛のやまをそそりえ  
 多ぶこそ何う免

右

禿字ハ  
 トヨク考  
 判ナリ  
 禿とそく 文をぶつと  
 ち多そくうつたそよ  
 ひの月又あしう  
 斬  
 ちあまはるのそそくうら河の  
 ねよあそく人をこひんや





月  
 たふゆはくしりくはり但まきまみ  
 ちんこをぎふ薄引もりいんぐ  
 ーうずうはてまひくするやあ  
 ぶ右月をほるるこころ  
 きくおんはるりあのまがこ  
 ここの外たよこ立  
 まさしてつとえはり  
 仍為勝



忘  
 たふ途のりうこつてあまあよりたあ佛をゆがめて  
 ともれる神狂邪ふうやけんたふ思あまうりちかのよまごう  
 ぶの月我うづられまらぶあこしううあやたあまうま  
 きあやゆわねひあまるとまらぶとらうていこう玉茶の  
 ともある勝本とてゆらぐんてら詞の終まらハ侍らん  
 たふまうしすああり仍為勝



三番

左

月よおぬきぬき人の丹の丹を  
いかに焼きぬあひづらの丹を

その無いやまー口の

かゆあまみおひ

きんどもきんら

れざまら

右

雲か糸の直き

とまゆきま

かこつて月よ

うさつて

おき



きづすすわわが  
のこくろをさうり

は いま

おせ

ども

であ

こそ

あら先



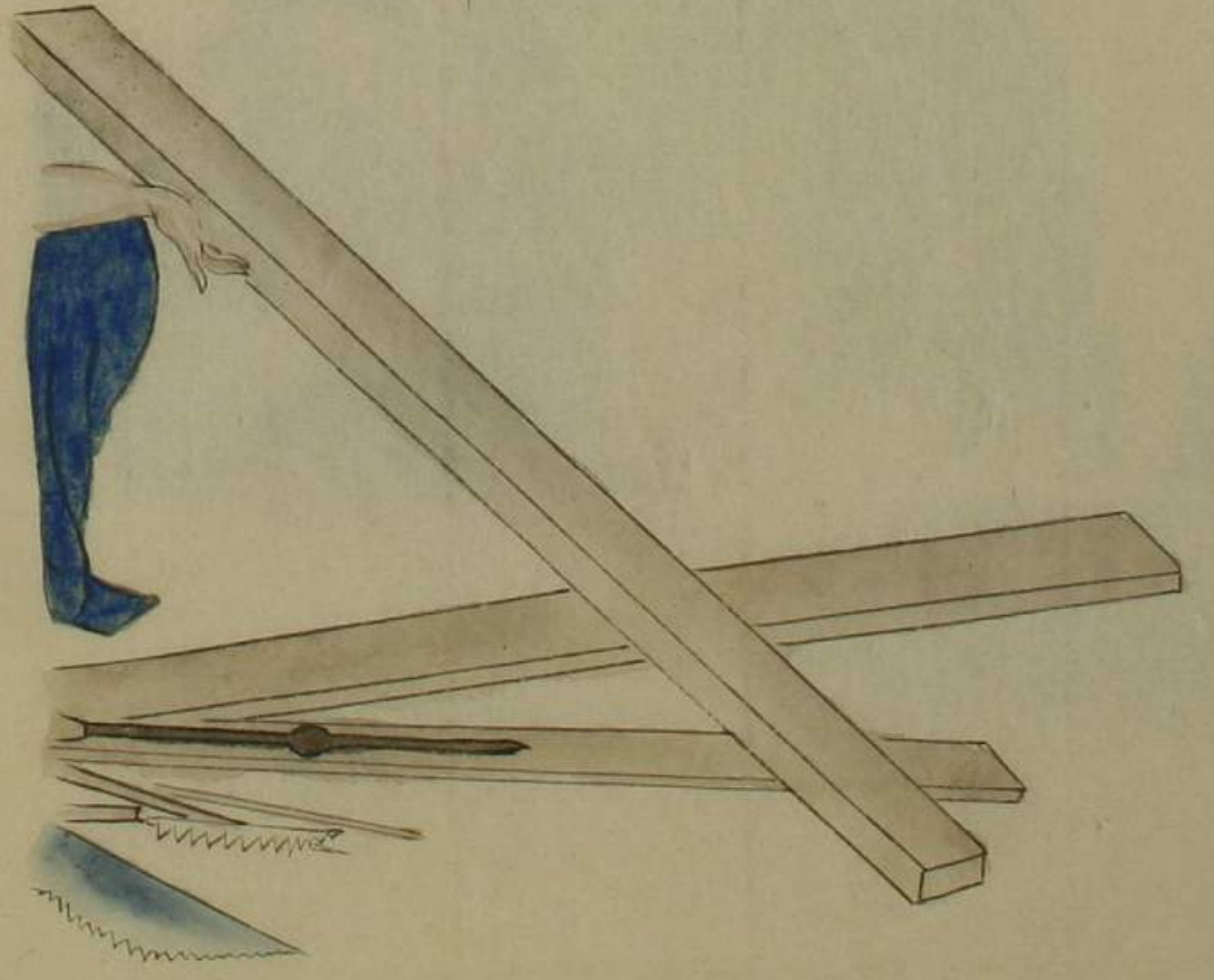
月

たふおつぎおーこんてなごらふゆる月よおぬ  
きぬき人の丹の丹をいかに焼きぬあひづらの丹を  
その無いやまー口の かゆあまみおひ きんどもきんら  
れざまら 雲か糸の直き とまゆきま かこつて月よ  
うさつて おき



月よよるれあるを海を難うて侍れ月を影よ  
 えそいさるる不心じ處をたす  
 但月を〜〜るれある  
 こゝろざ〜換  
 う〜〜仍  
 太舟猪

急  
 たやる〜刀の  
 か糸あよみ  
 博〜  
 さ〜と  
 守え



多  
 ち  
 角  
 だん  
 の  
 こゝろの  
 阿〜ぬ〜う〜  
 急の〜ろ〜  
 守えそを急〜は〜  
 仍〜た〜猪

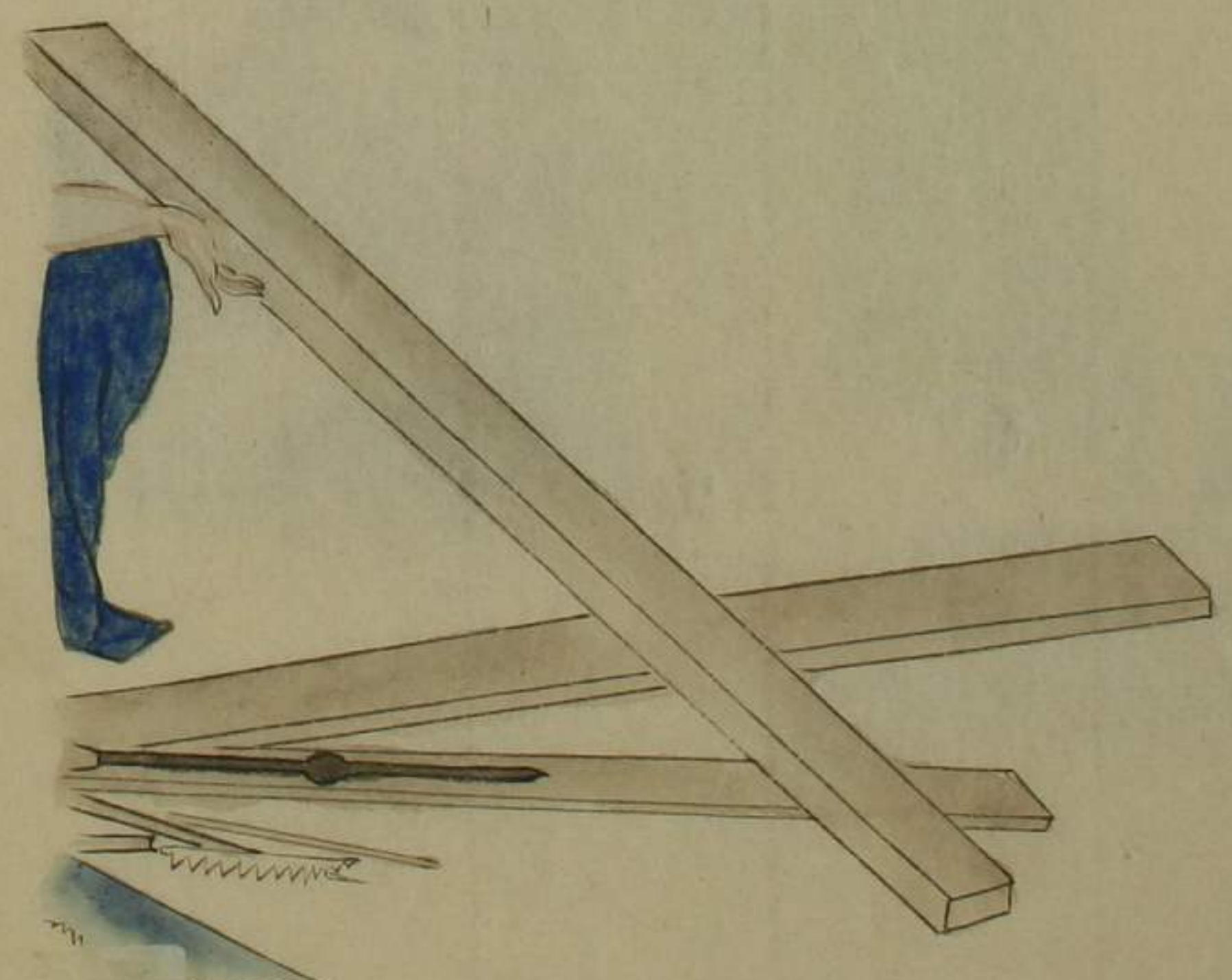


一本



月よりおれあるこそ御事難うて侍れ月を影と  
 えそいさるやふれむしはあきなり  
 但月をいへるれある  
 こころざし換  
 うこし何  
 大為緒

意  
 大なる一刃の  
 如縁ありまみ  
 博平  
 さしと  
 守え



多  
 大  
 角  
 だん  
 の  
 こころの  
 阿てねだりうみそ  
 急のこころざしお  
 守えそをなす歌とはやなり  
 何いたる緒







左  
 古始より後やがてわまうと指さるる  
 ちとてきつてお前にお伺つききぬ  
 りやうばやれれがなほけい  
 けり物おを  
 掛



四番 左  
 赤布の破あやまどる月ごとの  
 あややいのまきびやるる  
 君あまきりんしんき  
 ころ身許なきえりなる  
 大  
 あやあやあやあやの煙よ  
 月ごとのまきえりなる  
 ちとてきつてお前にお伺つききぬ  
 りやうばやれれがなほけい  
 けり物おを  
 掛



五番  
左



八月

引志免獲を

こゆま  
ゆん

君とあつらをよせてぞ新子りま  
つみと服もくらあききり

た

さざれもあふはらぬ月うづまの  
はやれき<sup>あせ</sup>うんぞうぞうぞうぞ

かきとる<sup>杯</sup>おちひある。無後ろく  
はあふまううららそす



五番

左

大いのほろろ  
しるあ



イ本



八月

引志免獲と

こゆま  
ゆん

君とまをらをしてぞ  
つみと服もくらあき

た

さざれもあまほろ  
はやれき

かきとるまぬ  
らあ

徴古圖録 美波曲集  
藏人及歌合 詞後光嚴院  
此圖イ本イ本イ本



月うさぎの  
 一葉  
 無垢  
 十人



美波苗集  
 徴古圖録  
 詞後光嚴院  
 土佐経隆幸  
 此圖一存可考





月  
 左方見づらしく  
 元よりなる組  
 あまりしむは情  
 とせんごう

しそ  
 月よ  
 こら  
 づら  
 わく  
 ちめ  
 右方の杖は  
 しそしゆしく  
 の房を忘れり  
 永く山中の  
 身を忘るは  
 為勝

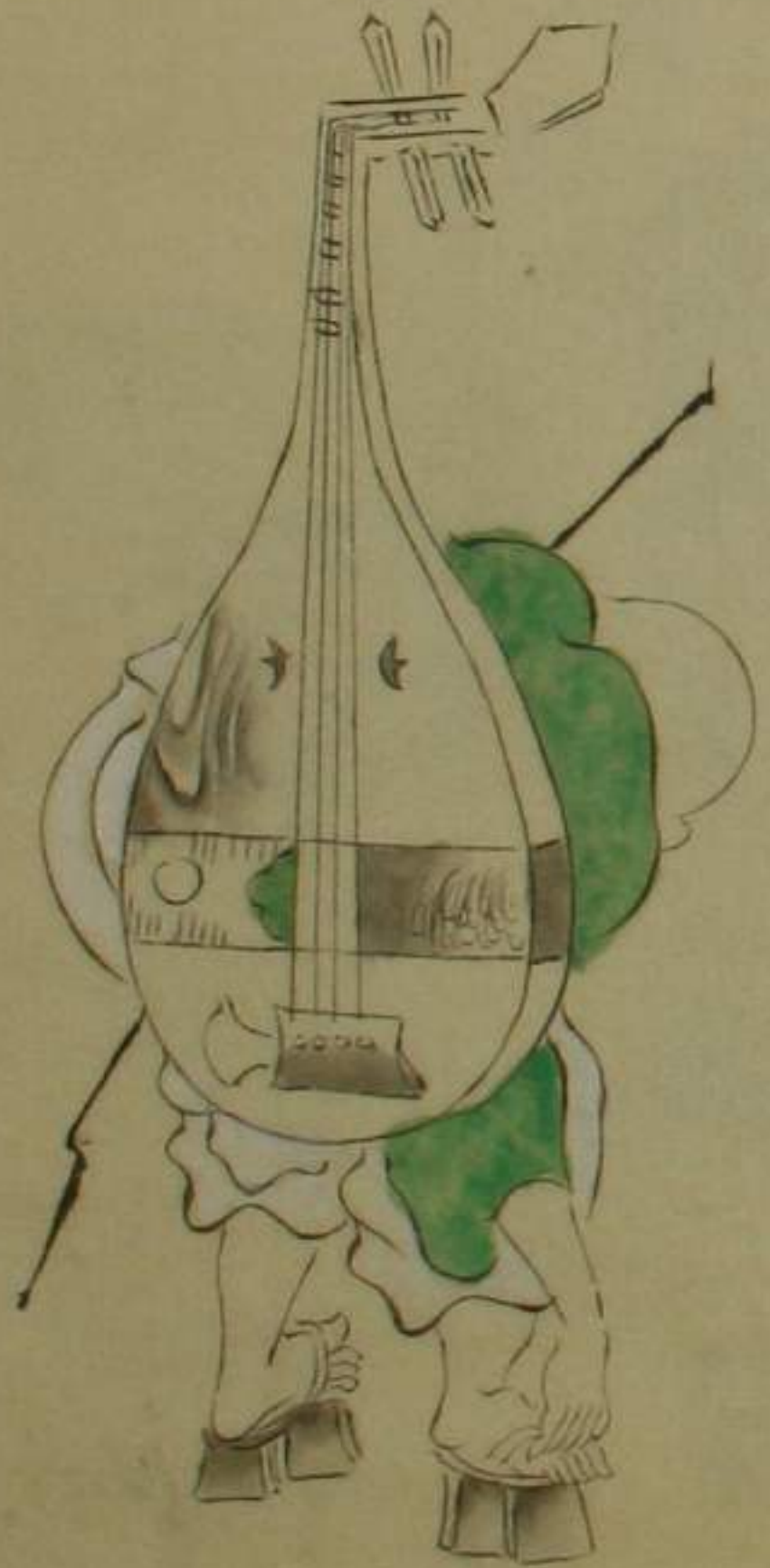


無  
 左方相かく  
 しそ  
 風情免づ  
 らしく

先  
 右生心僅一無勝者  
 五分明  
 為持



一本



一本前ノ盲人左眼開テ白ニ

一本杖





六番

た

月夜に因つていづれとよみてハ  
やうのしよとや人のらんらんむ  
ひと免見しつらん  
をのきぬかづき  
あまきききや  
臨子の聖

た

かちをよめて  
しるき月をらん  
庵まごのまご  
よごちる  
あつしよとらふわちる古くの  
あごがれやうこそげう船



月

たかま文字年よとて  
付れも漢字三十六  
の心をせられあり  
沈文ありつたふ  
つきて佛や  
す庵

無

た初めころを  
おてあの人も  
あふふふゆ  
たあごがれなる  
阪にともみたる  
足あふとけり  
付し仍持つて





六番

た  
月夜に因つていづれとよもあつてハ  
やうのいふとや人のいふとらむ  
ひと免見しうとられ  
毛のきぬかづき  
そのまぢきまぢ  
臨子の里

た  
かぢきまぢ  
しうき月をこら  
肩まぢのまぢ  
まぢまぢ  
あつてよあつてあつて古の  
あつてあつてあつてあつて



月

た  
たかぢきまぢ  
たかぢきまぢ  
のんまぢまぢ  
たかぢきまぢ  
つきてまぢ  
すぢ

た  
たかぢきまぢ  
たかぢきまぢ  
たかぢきまぢ  
たかぢきまぢ  
たかぢきまぢ  
たかぢきまぢ  
たかぢきまぢ



イ本



てとよあてハ  
のんからむ  
ん

わが古の  
はげうね



よんちん  
二十六  
あり  
ふ

るん  
ひあ  
りろく



イ  
本





七番

左

月を先が故の何りの色  
阿<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>て<sup>て</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>ご<sup>ご</sup>よ<sup>よ</sup>め<sup>め</sup>。

を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>陰<sup>陰</sup>

う<sup>う</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>心<sup>ん</sup>れ<sup>れ</sup>

玉<sup>玉</sup>海<sup>海</sup>花<sup>花</sup>い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>が<sup>が</sup>

そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>

あ<sup>あ</sup>が<sup>が</sup>ら<sup>ら</sup>ん

右

う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>意<sup>い</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>む<sup>む</sup>

し<sup>し</sup>ら

い<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>

し<sup>し</sup>



紅<sup>紅</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>よ<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>月<sup>づき</sup>

し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>

わ<sup>わ</sup>さ<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>

か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>す<sup>す</sup>を<sup>を</sup>蘭<sup>らん</sup>田<sup>でん</sup>の<sup>の</sup>細<sup>ほ</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>

う<sup>う</sup>き<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ち<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>こ<sup>こ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>お<sup>お</sup>

を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>の<sup>の</sup>

た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>



月

た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>

影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>

多<sup>た</sup>る<sup>る</sup>竹<sup>たけ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>

え<sup>え</sup>て<sup>て</sup>大<sup>おほ</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>の<sup>の</sup>

た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>の<sup>の</sup>



心算すうし 祢ねよの  
 月よららひん  
 侍う

無  
 たふ家の心を込め  
 所くくやると  
 しくし  
 いたし

新  
 敬  
 侍  
 新



の  
 染  
 を  
 の  
 新  
 女

ちみとど梅林の  
 月あよ仙方れきや  
 物ひ世三條の家の底よ良女備の  
 玉をあらとひてお世の二れを浅深舞う  
 ちのあのごきぬちんりすう上りの志  
 やおんごく位吉玉は意もけおんてゆ  
 ー 新女 何勝と分





八番  
た

一本  
八番ヨリ十番ニテ恋奇ト曰判詞ハカリ  
書タル鉄卷ヲ以テ緑色ニテ批捺ス画  
ハ下ニテツクニル

お花のあがりし結を  
いふせんぬお花を  
なす月のごころ花

お花のあがり  
お花の  
お花の  
お花の  
お花の



七

お花のあがり  
お花の  
お花の  
お花の

お花のあがり  
お花の  
お花の  
お花の  
お花の  
お花の  
お花の  
お花の  
お花の  
お花の





月  
たぬおとろききほらほら  
ゆゆは胸懐の白きちをす  
あはれ直意又落文の指貫たをき  
たらん指ふ覚え侍りおのみ文  
志をあら執りゆふくえ侍又月の  
らるるるるるるるるるる  
たふふふふふふふふふふ

おや  
原

い番左由

おあとのめをる。神武傳

おのあもれよんを  
おのあもれよんを

おのあもれよんを

おのあもれよんを

おのあもれよんを

おのあもれよんを

おのあもれよんを

おのあもれよんを



九番

九

九番  
 ねづつらぬれよ代のまて目影の  
 空の底をぬぎてくもる  
 わづらひきくひたてぬ  
 ソが鳥のあそびとまもふ  
 燕はまゝに

六

六  
 志ぞむ心 雨氣 けの  
 空の底をぬぎてくもる  
 のみ 心 を野

右の人  
 こゝれとあはて  
 けりし舟  
 ちかやうし  
 ねんひつすふ



目

目  
 たのむをうつと ねづつらぬれよ  
 空の底をぬぎてくもる  
 志ぞむ心 雨氣 けの  
 空の底をぬぎてくもる  
 のみ 心 を野  
 上敷珍うおとまもふ 感候は  
 仍右の爲備

七

七  
 ねづつらぬれよ代のまて目影の  
 空の底をぬぎてくもる  
 わづらひきくひたてぬ  
 ソが鳥のあそびとまもふ  
 燕はまゝに





十番

左

くものくもを敷計をもち  
あつてひろくまをうけり  
すけり月ころん  
やせりるるまをうけり  
たりるまをうけり  
てまをうけり

右

まをうけり  
おひくすのまより  
つてつ神の月より  
右すひき  
中すひき  
ろくろはき  
つてつ神の月より  
おひくすのまより  
つてつ神の月より



月

たあまの月を  
おひくすのまより  
つてつ神の月より  
おひくすのまより  
つてつ神の月より  
おひくすのまより  
つてつ神の月より

あまの月を  
おひくすのまより  
つてつ神の月より  
おひくすのまより  
つてつ神の月より  
おひくすのまより  
つてつ神の月より





十一番

左

かつ河もささのべに物い  
舟も月と  
うみさぬ

舟も

右

あまびき

あめの

うらみ

うらみ

あせ

つり



本和分抄巻七  
六条左衛門  
あまの船はあ  
らまのうら  
ひと

月

左に流る川もささのべに物い  
舟も月と  
うみさぬ  
あせ  
つり

左

あまの船はあ  
らまのうら  
ひと  
あせ  
つり



右  
すま  
つじ山  
後  
河

こまの月よ  
こまの月よ

うき身も  
敷く  
ゆき  
そのむきび  
あらんこそ  
あらん



十二番  
丸

もろの入の月を  
持おき  
ま  
うき  
ま

あつ  
あつ  
あつ  
あつ  
あつ







きほくむ

ちひひ

はぢぢ

ひひせせ

この外なる

家派

うぢ



た

月をみてさるるの海より  
身なるせせ

林をりしめ

ひひ

ひひ

を



月  
たふ海陽江の月を抄りてあるは謙は世を渡らん言  
今もくもあふるをんが花舞う五湖の波よきをさし思  
出らるるいふあふるをんが花舞う五湖の波よきをさし思  
とらるるいふあふるをんが花舞う五湖の波よきをさし思  
ゆりゆりいふあふるをんが花舞う五湖の波よきをさし思

無  
たははれをさしとてあふるをんが花舞う五湖の波よきをさし思  
今もくもあふるをんが花舞う五湖の波よきをさし思  
出らるるいふあふるをんが花舞う五湖の波よきをさし思  
とらるるいふあふるをんが花舞う五湖の波よきをさし思  
ゆりゆりいふあふるをんが花舞う五湖の波よきをさし思

右建保職人が合の書画を源義方よこしとて  
みはるるよまきしはしとて写しぬけが合を誰人の  
作しゆるをさしとて建保を 順徳院の御宇  
なりとては定家家隆の外かよ名をさし人お  
やろしし けし合をさし人このころのよまきしな  
はるる 此が合をさしとてその後甘露寺親  
長公の職人が合あらしめし建保の合合小  
かつりし ちや月をさしとて其をさし  
己職人が合とてそのころのよまきしとて  
はるる ちや年山村春水翁の物治は職人が合を



何れと申すの  
 ありとあるに  
 ありとあるに  
 ありとあるに  
 ありとあるに

年三月廿七日

伊勢平藏貞丈 画

長沢伴雄々京ニテ画タル此十二番ノ画ノイ本ヲ借テ  
 校ニルニミツ奇モ判詞モ職人ノ順モ乱レタリサテソノ  
 画ハナニテ大同小異アリ今コレクク校フルニ但一ス々  
 其大ニ異ナルト物ノ形ナド異テヤ又クハシク之ニ中ニ心  
 トニルヲノミテ校オシ低ニシテ朱ニテイ本ト標セル  
 コレニサテ其イ本毎紙單名アリ左ニテシ



本  
 コヨリ上缺八番歌判ノ上ニ以画アリ不詳





7月...  
1677...  
...  
...

はるかにあつたのちやうど今頃は  
あつたのちやうど今頃は  
あつたのちやうど今頃は  
あつたのちやうど今頃は

あつたのちやうど今頃は

伊勢平藏貞丈 画

己卯上缺八番歌判之上以画了不詳





八番右  
檜物師



八番左  
塗師





九番右  
舟人



九番左  
博打





十番右  
數珠引

以下缺



十番右  
針磨





イ歌判詞中歌一首臨寫

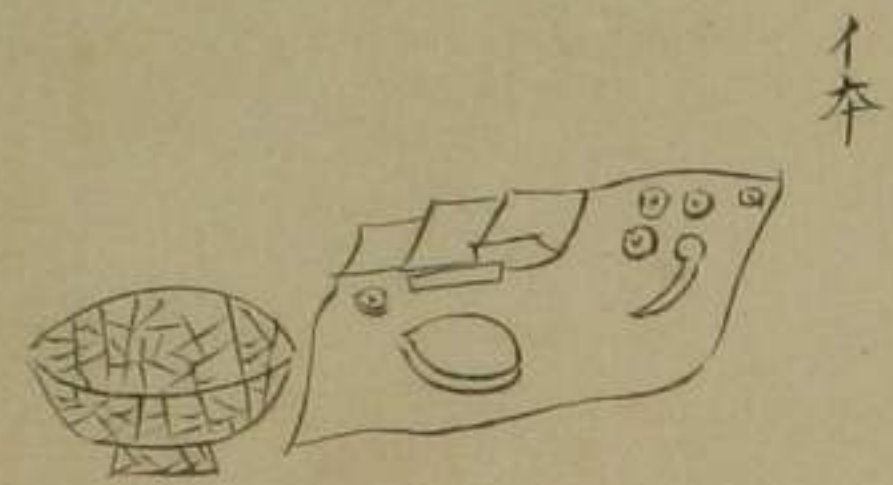
い妻 左 ぬ

はゆと乃こぬまやぬ神のあまこつ  
つちむしるーてむをれさうけり

右建保十二番ノ異本長澤伴雄ノ京ニテ寫タルヲ借テ校スルニ前ノ方ハ缺テ八番ヨリ十番マテアリテ以下モ缺タリサテ其八番マテ悉ク題ノ方ノ判詞ニテ其此本書緑校セルガゴトシ其画ハ悉本書ト異ニテ右ニ寫セルガゴトシサテ又八番ノ前ノ農人ノ画アリ本書ニ農人ハアラス又其前ニ殘缺ノ画イカカバド何レ公明ナラハ寫サズサテ其農人ヨリ上他ノ画卷ノ缺タル後ニ總タルニヤアラン画體ハ全同筆ト見エタリサテ件ノ本ノ画者上佐権守經隆嗣後光嚴之由トアリ伴雄ノ真書ニ右一巻田中訥言所臨寫本也其伴雄考説ノ畧云經隆ハ系譜ニ建長年中南敷障子画賢聖其圖傳寫在家トアリ後光嚴帝ハ文和元年十五戌ニテ即位應安七年三十七戌ニテ崩五ヘリ經隆ヲ建長年中世盛トシテ文和元年ニテ凡百年ノ間ニ時代合スルヘリ信友云スベテ古筆ノ鑑定ハ信シカク多ク書画ノ筆者或ハ寄合書ナド云モノ、筆者時代不同ノ鑑定マナリ徒然草ニ云ル道風ノ書ル朗詠集ノ類ニ古書画ハ古色ノ存スル趣ヲ鑑定シテ珍重スルニアナカキ筆者ヲ論定スヘカラス

建保寄合異本画





左醫師

飛鳥井筆のたまはせし西の  
高を書きく非なり



左佛師

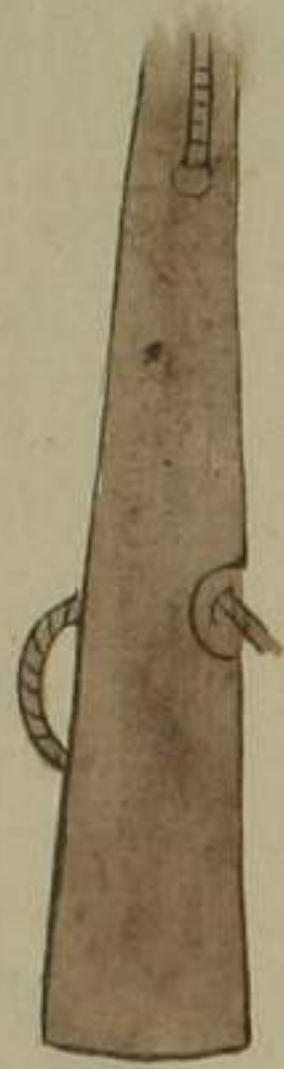


右陰陽師





右  
經  
師





左  
服  
治



イ本ニ鬼ナレ  
童子ヲアツキテヤ





右番匠





右鑄物師

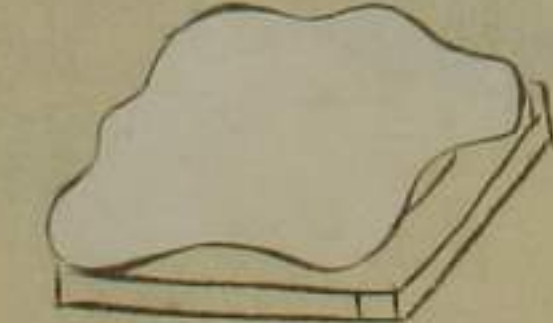


左刀磨





左巫女





右盲目



左深草





左  
緝  
搔



右  
礬  
塗





左塗師



右莖抄





右檜物師



左檜物師

飛鳥井筆の本  
さいごうとあり奉

イ本  
右ノヒトミヤシ





左針磨



右船人





左桂女

イ本コノ画ハ點賣ノ女ヲ画ケリ  
ホニ寫出ス



右錫挽

信友云上ノ本ハ數珠引トアリテ丹モ画モ  
其ト云フコノ本ニカク画ケルハ數珠ヲ  
假字ニ云クナド書名ヲト錫ヲ  
トオモヒカク画ケルモノニシカレバ此  
異本ハ上ノ本ヨリ後ノ画ナリ  
トシラル





左商人



右大系人





右海人



去安永三年建保藏人歌合并繪成字一画及今又此本を以て  
授合を以て小安永判の初を因りて繪を以てり画之を今も  
仍今唯繪のみを寫しぬ

天明元年辛丑四月廿二日

伊勢平新次郎



鮎うら

イ本桂女の所あり  
挂川の鮎うら



天明二年四月又イ本ヲ見ルニ繪  
少異アリ画者ノ名不知歌ハ飛鳥  
井ニ樂軒ノ筆ナリ歌付遠アリ落  
字モアリ 貞丈

鶴岡神主判職人歌合

イ卒晚

いづこの年より鶴岡の放々舎ことよ事このりり、菟園の市行  
粘心もどろろろろ一日の見物それバ万人きりいりぞろ道々  
のまどもあつハ役所いづいあつと友よこそはれてやとくひく  
らに秋のかつと月のさうりふれバ雲をままり早まきとふ  
て南よれそめえ海濱茫々きり、秦向は一千餘里思ひやき  
北よりつとつとつと社壇重くとつと漢家の三十六まよつと  
に、爰ふろつとつと二人にをらくとつと都わく東北  
院に念佛、九月十三夜よあつめて、法道の歌合けりけり、よまあ  
ばぬり、と、榆柳並の敬神、八月十五夜を照らして、露生の化  
度をみりなると、か、歌法今よりむと、これ良辰と得たり、舊  
遊瓜をたしと、新跡と番ひとんと、あけもバ、あつと、まきに  
世渡りあつと、つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

神主判職人



前同師主

白露... 在漏... 判者... 勝負... 優劣...  
白露... 在漏... 判者... 勝負... 優劣...  
白露... 在漏... 判者... 勝負... 優劣...  
白露... 在漏... 判者... 勝負... 優劣...

Handwritten notes in cursive script, likely related to the performance or the piece itself.

歌合

類

月 出

作者

左方

樂人

宿曜師

持經

遊后

繪師

鋼細工

疊差

鏡磨

相撲

猿樂

相人

樵夫

右方

舞人

竿道

念仏者

白拍子

後織

藤繪師

御簾編

筆生

博勞

田樂

持者

漁父



溝師  
濱師  
新者

八幡宮神主

新者

氏

舞合

一番

左 樂人

この糸や月のまぶしにかまらんばかりし梅の影をばけり  
一夜だたあつてもさぬ笛行れあかきともいまきせりや

右 舞人

きらきらあはれ入るるも神代りに行はばおほい山のもれ月  
立わらもよめはけりやあまのつらき人のいざほもつか  
判云月は左の月のがさし梅はつらきさし返り  
羅云遠くまじや作んまじらぬはてあまのつらき  
玄宗のあまのつらきいけさあまのつらき  
夜をまじり  
ちと入るるは神の陽のなれとてききて所陵王





のきぎひともせむきや  
 両首とも温故幼新  
 ともふくに月宮に仙遊  
 かねたうやひのふり  
 へたが勝とつたの笛竹  
 のあまのいづかき  
 あとびくあ何とびくと  
 こころこころ  
 ゆるんや  
 へんといゆるりれ  
 九の右の勝

一物  
 一人  
 一人  
 一人  
 一人



二番

左

宿曜師

夕立の雨は思はずとも月夜は思はずとも  
あまのいしは月夜に思はずとも思はずとも

右 卒道

あまのいしは月夜に思はずとも思はずとも  
あまのいしは月夜に思はずとも思はずとも  
あまのいしは月夜に思はずとも思はずとも  
あまのいしは月夜に思はずとも思はずとも  
あまのいしは月夜に思はずとも思はずとも

刺し月のたねの歌  
あまのいしは月夜に思はずとも思はずとも





あがめる多頭あそびに疎なる  
白ひをよのむよこけは可る持  
や作し

あはたのこころ

より信也のうま

いづれお救え作し

おまゝおなまき

そのたのこ

そゝぬゆら

あそれ作し



二番

左 持經者

ゆきしるし 袖の志はたすいおど  
をりておのこころの月  
志のびおろろ人よそ紙の  
くろくおとをいれ

右 念佛者

あられつら果得涅槃はんま  
常世世ある月夜をくまき  
く志のあやこつておれ  
すがりて人よおるいん

刺云月は左歌五百史子不  
そげ右歌早八歌門を  
さう歌の文句おれ勝方定





中ぐさのつづー

悪のたがひのつづーのつづー  
秋のつづーのつづーのつづー  
海にうたがへたつづー

はらわねをたがひ

つづー

相のめえ

あはれ

たのふたりのあはれ

あはれ

自由なつづー自由なつづー自由なつづー

あはれ



あはれ

四番 左 遊女

河津の秋を月夜に  
船をたがひの波のつづー  
あはれ

あはれ 白拍子

秋のつづーのつづーのつづー  
月をたがひのつづーのつづー  
あはれ

あはれ 白拍子  
あはれ 白拍子  
あはれ 白拍子





五番

左

繪師

おれは月の夜に、まてをよめる

波の志や草をたわふなま

くらゐをよめられんや

えぬ世をうらなふ

右

綾織

甲をよめやとて月をよめ

をれびくやとてうらなふ

とてよめやとてうらなふ

おれのおもひはあつ

刺し月をよめ綾織下り



船中治上と申れ浮沈を志す  
まをれんとしぬらうらなふ  
勝とてはぬる  
志したのまよあつ  
とてよめはれぬ目  
やれとてはぬる  
ゆるし  
右のま  
まのまをよめ  
すま首形感動願  
可也勝を欣





くらしては侍で暮らすの故に之  
 ちかはれぬ  
 忠の善と左をのつら  
 はよはぶしちいつら  
 いぬ病よまきこく新  
 めききさるるのまき  
 左の侍よ



六番

左

銅細工

げちききめあきのまらつれ  
 月ののこそみぐれまき  
 ちるれあ人の心のこいごを  
 かろろろろろろろろろろ

右

時珍師

月げみききまらまら  
 うきよせそ  
 ちるれあ人の心のこいごを  
 かろろろろろろろろろろ



判云月のた右から何あぬ  
 判



しくは美いさるるにけり  
 色も雨も世あるはなよそ  
 さあつちかひはなまのちかひに  
 ちかひにちかひにちかひに  
 正がつつひに正なる  
 ちのあふはけり  
 ちり  
 可為持



七番

た

あふた

いづれは月のひかりはさげんは  
 多みの浦のこころ  
 多むれはあつたうけあつた  
 多むれはあつたうけあつた

右

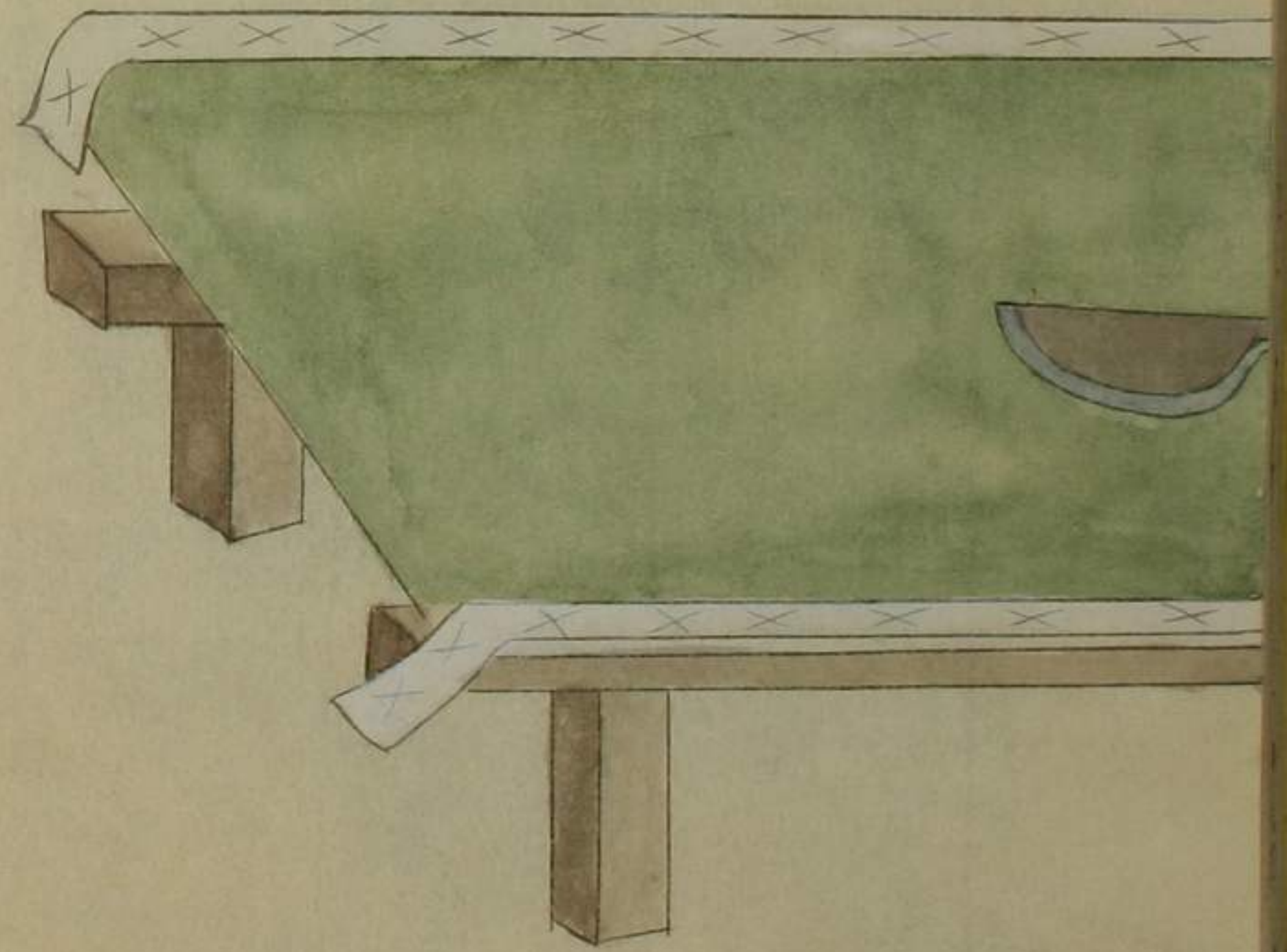
御簾編

夕暮れはさげると  
 月くはくはさげると  
 あつたうけあつた  
 多むれはあつたうけあつた  
 あつたうけあつた





刺玄月はたのひくく  
 中アおれくあがわらうよ  
 坊し、たを時々夕の  
 まぎれ月と争うならむを  
 されいもくまう敷るきき  
 くららららららららららら  
 坊しおれぬよあつ様の  
 刺たのあきわくはに  
 先をたのぬいんき  
 のごぬいぬれぬき  
 くはらぬたのぬきぬき  
 白よめるくはれぬひ  
 畑あまはらうる播





左

鏡磨

新下く入はよやうとうりて鏡を磨  
 磨りし加こころをれ  
 志やうくれが侍もんぞ  
 月をうらめ

右 筆生

水苔はさよとれはあめん  
 月さの毛れまをらう  
 人て我知りてをい  
 磨りし加こころをれ

剃り月たのふをんふよ百穂  
 新下君まわう不照  
 安



と毛のひさしをけりて侍を

ちうとまの思つて一はあ月の知の毛  
 のとらるる毛をそのゆ急あう侍  
 仍侍とや侍

磨は右衣をまきこころ  
 めはひるおと  
 侍のす大右  
 鳥の舌をかく  
 こそあは  
 侍をれ  
 ちえく切らう  
 て侍を



可お侍



九番

左

相撲

日たひて月くそをたふしつかりつてひらうすめひのんらのとて  
やちもあふむふんよんをこつれまといふまはれん

右

惜骨

こやめ月毛の筋を  
引とめく筋のくぬ  
川よすそや河ひん

まごてよあふよ

あふゆの

あごて

つらぎ

あむ



よしなうりりは

判言月ハ筋をあれども一月よハ  
しあふよゆとありおし  
おしをよそくつれ  
はれくさよげた

いさ

よそあ

あふひる

あふひる

あふひる

あふひる

あふひる

あふひる





以志ま〜  
 侍〜  
 侍〜  
 侍〜  
 侍〜



左  
 卷樂

月はあふい〜  
 月はあふい〜  
 月はあふい〜  
 月はあふい〜



大 田樂  
 月を〜  
 月を〜  
 月を〜  
 月を〜  
 月を〜



刺云月の左き

~~~~~

左き~~~~~

いさよ外

ゆん

燕

うん

し

太無

~~~~~

持~~~~~

~~~~~



十一番  
左

相人

か~~~~~

右 持

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

刺云月左~~~~~

~~~~~





左

推中

月の夜に帰る人を送る  
山道風の谷の夕ぐれ

あはれなきはいつ

あはれなきはいつ

つるさひやくしん

右

徳文

やまのふもとに  
浦を流る月夜  
いつ歌をたへん



花の夜もどはる勝  
あはれなきはいつ  
あはれなきはいつ  
あはれなきはいつ

左の夜のゆき  
あはれなきはいつ  
あはれなきはいつ



あつと人のくらを つまごうありいなる  
はるかにし

利之月ハ左歌 谷<sup>若</sup>耶<sup>溪</sup>棒の風をよもあらは  
鳳凰池の月さへおひひ出られはし

古歌 掉歌 一曲

釣漁翁も待れ

くららとくまし

いづきと  
くららとくまし  
待れ  
持

魚のなる義婦坂の片<sup>い</sup>き<sup>い</sup>原<sup>い</sup>  
つひと 煎路をこま<sup>い</sup>れたの<sup>い</sup>す  
窟始<sup>い</sup>堤の<sup>い</sup>遠<sup>い</sup>を<sup>い</sup>る<sup>い</sup>て<sup>い</sup> 釣<sup>い</sup>交<sup>い</sup>り  
ま<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>い<sup>い</sup>し<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>

ゆる<sup>い</sup>  
生<sup>い</sup>路<sup>い</sup>  
や

名<sup>い</sup>取<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>が<sup>い</sup>  
お<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>  
ゆる<sup>い</sup>  
た<sup>い</sup>の<sup>い</sup>勝<sup>い</sup>  
中<sup>い</sup>魚<sup>い</sup>





神主

正く志先

たぶき

そつ

たつ

事

神

さび

袖の

月

子



右職人歌合画本三部  
依一本比校

建保二年十二番同画異本  
神主判十二番  
課人書寫畢

天保九年九月二十日

信友

他日一本校  
又一本校了  
天保九年除日夕



2

3

天  
新  
五  
山  
卷  
上  
第  
二  
十  
一  
回  
第  
一  
章  
第  
一  
節  
第  
一  
回  
第  
一  
章  
第  
一  
節  
第  
一  
回  
第  
一  
章  
第  
一  
節

天  
新  
五  
山  
卷  
上  
第  
二  
十  
一  
回

第  
一  
章  
第  
一  
節

第  
一  
回

第  
一  
回



